

遺書

— 水無月

結莉 —

僕は25歳のフリーライター。

好きな記事を取材する。

今回僕が取材しているのは、女子中学生の自殺についてだ。

今までの調査でわかったことはまだ少し。

名前は片上 樹乃。

中学3年生で15歳。

県立高校への入学が決定していた。

学校では特にこれといった目立つ点がないたって普通の子。

家庭でも、3人兄妹の末っ子。

家庭内での問題は一切ない。

僕が特に気になったのは、なぜ卒業式の前日に自殺したのか。

そもそも、これは自殺なのか？

彼女・樹乃は学校のプールで溺死していたところを発見された。

発見当時ギリギリ息があったが、その数十秒後に死亡した。

僕は普段は自宅で執筆をする。
けれど、筆が詰まったりしたら散歩へに行く。
そんな時に僕は出会った。

片上樹乃に。

出会ったといっても、僕が思うにすぎない。
3月8日月曜日13時38分に街中ですれ違っただけだにすぎない。
樹乃は近くのコンビニで買った500mlパックの牛乳を、大事そうに持ちながら走っていた。
たかが150円程度の牛乳をなぜそんなに大事にもつのだろう。
気づくと僕はこっそりと彼女のあとをつけていた。

樹乃は商店街の一番はじまで来ると曲がった。
おかしい、そこに道などはない。
樹乃が曲がった場所を覗き込む。
そこには人がやっと通れるぐらいの細い道・・・いや、建物と建物の間隙間があった。
僕は彼女とは違い、少しメタボ気味だ。
腹がつかえてしまうかもしれない。
けど、ここまで来たからには引き下がるわけにはいかない。

“道”を進んでいく。

近くに食べ物屋でもあるのか、においがしてきた。

光が差し込んできて、出口にたどり着く。

すると、そこには見たこともないような大きな樹木があった。

高さはそこいらのビルよりもはるかに大きい。

この大都会、東京でも立派な樹木が育つのか。

僕はしばらく樹木に見入っていたが、しばらくして女の子の声が耳に入ってきたのを境に我に返った。

声の主は樹乃だ。

「きゃはは」と甲高い声で笑っている。

一人・・・ではないようだ。

一緒にいるのは、小さな黒猫。

子猫だろうか。

樹乃は大事そうにその猫を抱きしめながらなでていた。

ガサッ

迂闊だった。

思わず足を動かしてしまったのだ。

樹乃はすぐに気付き、僕の方を振り返った。

猫を抱きあげ立ち上がる。

「...どちら様ですか・・・？」

樹乃の瞳はさっきとは違った鋭いまなざしだった。

「あ、僕は三越といいます。三越 将也」

「...三越さんはなぜここに・・・？」

この場合、なんと答えるのが適正なのだろうか。

“あなたをつけてきたからです”。

事実を述べるとすればそうなる。

けど、いくらなんでも怪しすぎる。

嘘、をつくしかないだろう。

「いや、猫を追っていてね。きれいな白い猫だったんだ。それで気づいたらここにいて」

「...白い、猫？」

やはり、不振がられている。

ここは立ち去るのが無難であろう。

「すぐ帰るから気にしないでくれ。それじゃあ」

「あ、待ってください」

僕は驚いた。

なぜなら、樹乃が僕を呼びとめたからだ。

「あの・・・あやしがってすみません。滅多にここに人、こないのよ」

「え、あ・・・はい」

樹乃は小さく頭を下げるとその場に腰を下ろした。

「ここ、暖かいですよ。どうぞ」

僕は従うようにその場に足を進めた。

驚くことに、彼女の言った通り樹木の下は木陰なのになぜか暖かかった。

「どうも」

「私は樹乃と申します。片上 樹乃です。この猫の名前はヘルです」

「へえ、いい名前ですね」

僕がそう言うと、彼女はその黒猫・ヘルを僕の膝の上に乗せてくれた。

「三越さんが探していた白猫は、多分ルチアだと思います」

「...ルチア？」

「はい、ルチアです。ルチアはおばあちゃんが飼っていた猫です。ヘルとは恋人同士なんですよ」

「・・・へえ」

猫の世界でも恋人同士はあるのか。

ま、子猫が生まれたいするのだから当然だろう。